海洋国家日本の将来と関西

パネリスト
桂　文枝氏（落語家）
近藤誠一氏（前文化庁長官）
園田茂人氏（東京大学大学院情報学環教授）
村田晃嗣氏（同志社大学長）
コーディネーター
国分良成氏（防衛大学校長）

「多様性」と「寛容」の精神が関西文化の発信力を高める

今、アジアで起きていること

国分　本日は、アジア太平洋地域が今どう変わりつつあるか、そのなかで日本が発揮できる力や課題は何か、さらに大阪を中心に関西が日本の将来のためにどのような役割を担っていくのかなどについて話を進めていきたいと思います、

園田　アジア太平洋地域、とりわけ東南アジアでは今、中間層の人々が経済的に豊かになって消費が拡大し、インターネットを利用してさまざまな国の物事や情報を生活に取り入れています。商品だけでなく、民主主義という政治制度から文化、さらには大衆演劇にいたるまで幅広く受け入れ、発信しています。そこでは自分たちにとって極めて有用で使い勝手のよいものを選び取っているようです。例えば香港では日本の大衆文化が大人気ですが、日本の型にとらわれず、自分たちが面白いと思ったエッセンスだけを取り入れ楽しんでいる。そういう文化のキャッチボールが、海を越え、国境を越えて盛んに行われるようになってきました。

村田　政治学の分野では、1965年に京都大学の高坂正堯先生が「海洋国家日本の構想」という論文を発表しています。65年といえば東京オリンピックの1年後で、5年後には大阪万博が開催され、日本が活気に満ちあふれていた時期です。2020年の東京オリンピック開催が決定しましたが、一度目の1964年の頃とは国内外の社会的・経済的状況が大きく異なっています。日本では少子高齢化が深刻化し、国際情勢では米ソ冷戦が終結する一方、米中の新たな関係が進展しています。また、日本はアメリカと中国という二つの大国に挟まれ、太平洋、日本海、そして東シナ海も視野に入れた海洋国家として、米中関係を悪化させない努力をしつつ、国内の活力をどう取り戻していくのかという難しい課題に直面しています。しかし、依然としてアジアの中では日本が最も進んだ先進国であることは確かです。これからも、日本が歩んできた道を他のアジアの国々が追体験していくことでしょう。そこで日本は、これまでの成功体験だけでなく、失敗体験もアジアと共有し、それを克服できるメカニズムをつくっていくことが重要になると思います。

心から心へ伝わる文化の力

国分　近藤さんは文化庁長官として、三保の松原を含む富士山の世界文化遺産登録に尽力されました。

近藤　富士山の世界文化遺産登録を成し遂げるにあたって、文化の力というものは国境を越えて心から心に伝わるものだと改めて実感しました。私たちがアピールしたのは、日本人は富士山から素晴らしい美意識を与えられ文化を醸成させていったことです。葛飾北斎、歌川広重に代表される浮世絵や信仰。人間も自然の一部であり、自然の懐の中で一体となって生きていくという知恵や、目に見えない価値。そして「間」や「余白」の美意識などを世界に訴えました。こうしてアジアの方々からは大きな賛同を、欧米の方々からは近代合理主義のなかで忘れがちであった、人間が本来持っている自然への敬いを喚起させてくれたというメッセージをいただきました。そういう意味でも、私たちは日本の文化に自信と誇りを持つべきだと強く思い至りました。

桂　落語は約400年の歴史があると言われ、現在の落語は、約120年前、坐摩神社（大阪市中央区）境内に桂文治が小屋がけの寄席をつくったことに始まります。以来、落語は時代の息吹を取り入れ、受け入れられるようさまざまに変化してきました。だからこそ今も生き残っているのだと思います。以前、アメリカ公演で地元記者から「落語が日本の伝統芸能であることが非常に不思議だ」と言われたことがありました。つまり「笑い」は伝統芸ではなく、チャップリンやジャック・レモンのような個人芸ではないかと。しかし私は、何百年

桂 文枝氏

近藤誠一氏

園田茂人氏

村田晃嗣氏

国分良成氏

という落語の伝統を受け継ぐとともに、時代に応じた面白さを追求していくことが、世界に誇れる日本の素晴らしい「笑い」のセンスだと思います。

良きリーダー、良きフォロワー

国分　これからの日本、アジアを担っていく若い世代の動向についてはどうでしょうか。

村田　最近はグローバル人材の育成がよく提唱されています。同志社大学の創立者・新島襄は、「人材」ではなく、「人物」を育成すると言っています。「人材」というのは字のごとく役に立つ人です。しかし「人物」というともっと内面的に深いものを持っている人でしょう。リーダーシップ論になると、とかく松下幸之助翁など偉い人の話ばかりになりがちですが、リーダーシップというのはリーダーとフォロワー(従う人・支える人)の関係の中で成立するものです。つまり立派なフォロワーがいなければ、立派なリーダーは生まれません。ただし、一人の人間が常にリーダーである必要はない。職場ではリーダーで家庭ではフォロワー、職場ではフォロワーで自治体活動ではリーダーの役割を担える。一人の人間の中にそれぞれの側面がある、つまり多面性のあることを理解して、人物、人材を育てていかなければならないと感じています。

園田　2008年に日本を含めアジアの大学生を対象に行った調査によると、日本の学生は海外留学で研鑽を積むことに概ね関心を示していますが、それをどう活かすかとなると途端に国内での就職の話になります。それだけアジアの中で日本が安定しているということですが、中国やタイ、ベトナムの学生たちは、とにかく2～3年は外国で学び、それをキャリアにして世界で働きたいという意識が高い。そういうメンタリティーをアジアの新興国の学生たちと対比してみれば、日本の学生の脆弱な面が見えてきます。

近藤　EUと東アジアの大学生を比べると、海外に留学し単位を所得して帰国する比率は10対1というデータがあります。また、東アジア圏内においては、留学生のほとんどが日本と中国に集中し、日本や中国から東アジア諸国への留学者は極端に少ない。EUにはエラスムス計画（European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）という、大学生の交流を目的とした事業があります。高等教育機関における他国間協力、言語をはじめ各国・各地域の伝統や精神を尊重し、違いを認識させつつ相互理解を促進しようとするものです。残念ながら東アジアでは、そうした国家間の交流システムはありません。東アジアにエラスムス計画をつくるのが私の夢でもあります。

桂　私は世界各国で落語公演を行っていますが、なにしろ日本の話芸ですから、字幕や同時通訳などを駆使しても、その魅力を伝えるのはなかなか難しい。そこで、昨年行った桂文枝襲名記念パリ公演では、言葉の遊びで笑わせるネタではなく人情噺にしたんですね。すると現地の方々から「素晴らしかった！」「アートだった！」と。言葉はわからなくても心は伝わるものだと実感しました。若者たちのお話が出ましたが、私の弟子に「三輝」と書いて「サンシャイン」と読むカナダ人がいます。彼は今、米国、カナダ（約30公演）で、私の「創作落語」をまさに本場の英語を使って演じるツアーを行っています。私は落語を世界に広めるには、この方法が一番ではないかと思っています。

イノベーションを起こせる関西に

国分　最後に、関西が今後どのような役割を果たしていけるのかについてお伺いします。

村田　関西を語るとき、「伝統」は欠かせないキーワードだと思います。また、大阪、京都、神戸と個性豊かな三つの都市

があり、地域全体に多様性があるということも大きな魅力です。アメリカのある都市経済学者が、どんな大都市でもイノベーション(革新)が起こらなければ衰退すると言っています。イノベーションを起こすには、才能のある人が集まることが必要です。ではどうすれば集まるか。それは多様なものを受け入れる寛容さだと言っています。寛容な街には、才能豊かな人が集まってくるというのです。関西人の気質の一つにアンチ東京がありますが、アンチだけでは先はないと思います。私たちは、関西以外の地域に対して寛容でしょうか。さまざまな文化を受け入れる寛容と多様性を育んでいくことが、関西がイノベーティブであり続けるために非常に重要なことだと、私は思います。

園田　イノベーションというと偉大な天才が書斎にこもって考えつくというイメージがありがちですが、実はそうではなく、日常的な工夫や面白いことに目をつける、そういう些細な行為から起こってくるんですね。例えば日本の代表的な料理に寿司と天ぷらがありますが、これを同時に味わうために「寿司天ぷら」を作ってみようという人が現れる。成功するか否かに関わらず、そういうところから文化の強みを見つけていく。そして多くの場合、そういうチャレンジングな人は本道から少しだけ外れたところにいる。まさにサンシャインさんのような人です。それをプロデュースする人がまた、少し外にいる。外にいる人を上手く取り込み、中にいる人を外に送り出していく。多様性のある人がそういう感性を持っていれば、いろいろな文化の発信・受信が促進されるのではないかと思います。

近藤　私は、関西には、日本が陥っている「東京病」、つまり官主導縦割り、文化の軽視、短期成果主義などから国を救う力があると思っています。具体的には、関西に根付いている伝統文化を重んじ、異なる新しいことをどんどん取り入れていくということです。伝統芸能を見ていても、活気のあるジャンルは常に新しいものを咀嚼しながら取り入れています。そういう力が関西にはあります。東京病にかからず、ぜひ踏ん張っていただきたい。

桂　村田先生が言われたように、大阪が発展してきたのはまさに寛容の精神だと思います。大阪の寛容さとは、「しゃれ言葉」に代表されるようなユーモア精神です。見るだけで何も買わない客を「ひやかし」だとストレートに言わず、「夏のはまぐり」としゃれてみる。「身腐って貝腐らん（見くさって買いくさらん）」と言うわけです。また、資金不足の人は「赤児の行水」。たらいで泣いてる(お金が足らないで泣いている)。他にもたくさんあります。こうしたユーモア精神があれば、大阪は大丈夫だと思います。最後に2020年のオリンピックですが、東京ばかりになるのは心配なので、私はここでもう一度、大阪への万博招致を提案させていただきます。

国分　「多様性」「寛容」「イノベーション」「ユーモア精神」と、重要なキーワードが導き出されました。関西のより一層の文化力発信に期待します。ありがとうございました。

関西・大阪文化力会議を終えて

地球規模の視座を持って
アジアの国々と心の通い合う交流を

公益財団法人 関西・大阪 21 世紀協会
理事長　**堀井良殷**

今回は、エズラ・ヴォーゲル名誉教授から、現代中国の父といわれる鄧小平の生涯と思想を通じて、現代中国の源流と今後中国が進むべき道について示唆に富むお話を伺いました。また、パネルディスカッションでは、大切な隣人である中国、韓国はもとより、広くアジアの人たちと文化を通じて理解と交流をどのようにして深めていくのかという課題に対し、「多様性」「寛容」といった重要なキーワードをいただきました。

ここで私は、当協会の設立に関わられました梅棹忠夫先生が、かねがねおっしゃっていたことを思い出しました。それは、「地球の北緯20～50度、東経120～150度に位置している日本にとって、その横軸（緯度）上にある国々、つまり日本列島の西側にある大陸国家とうまく付き合いながら、さらには縦軸（経度）上の国々とも連携を強化していくべきだ」というものです。

とくに関西は、縦軸上にある東アジアの国々と深く付き合ってきた歴史があります。17世紀初頭の大航海時代には、ご存知黄金の日々を築いた堺の港から、御朱印船や末吉船などが頻繁に東南アジアの国々と交易や文化交流を展開しました。本日は、こうした歴史を未来に活かしていくべきだというご意見もいただき、あらためて、関西は横軸・縦軸ともに心の通い合う交流によってアジアの発展と平和に貢献していかなければならないという思いを強くしました。

今回の関西・大阪文化力会議「中之島宣言」は、そうした広い視野に立った思いを込めて、本日の議論を総括したものであります。朗誦していただくのは、文化と芸能の神である「摩多羅神（またらしん）」に扮する和泉流狂言師・小笠原